

国語科における小中9年間の「書くこと」の系統性を踏まえた具体的な指導・支援の在り方 —自分の考えを明確にした文章を書く力を育てるために—

植地 洋子

国語科の学習において日常的に自分の思いや考えを書く機会を設け、決められた字数の中で簡潔に文章を書く力が重要視されている。そこで、本研究では「自分の考えを明確にした文章を書く力」に焦点を当てた指導・支援の在り方について研究を進めた。とりわけ、文章の構成から記述へと学習が展開される中で、予想されるつまづきを明らかにしながら、よりよく書くための手立てを探っていきたいと考えた。小中9年間を見据えた中で、本年度は「書くこと」に対する苦手意識も芽生え始めると言われる小学校中学年・高学年における授業実践を進める中で、系統性を踏まえた具体的な指導・支援の在り方を探り、「小中9年間『書くこと』到達目標に関する一覧」を作成した。

第1章 国語科教育の現状と課題について

第1節 「書く力」の実態と課題

国立教育政策研究所は、平成18年に「特定の課題に関する調査」を行った結果、文章の構成について課題が見られると報告している。また、意識調査では「文章を書く学習は他の教科などの学習に役立つ」と回答している子どもたちは多くいるものの、学年進行に伴い「書くことが好きだ」と回答する児童・生徒が低下する実態であることも報告している。

本市教育委員会が行った平成18年度京都市学力定着調査（小・中学校国語）では、相手や目的に合わせ、文章の構成を考えた書く力を育てる指導が必要であると指摘している。

先行研究を探る中で、書きたい内容さえ見つかれば文章が書けるということではなく、相手にも伝わる書き言葉に「変換」していくことのできる力が備わっているかどうかが問題であると考へた。また、文章を書いている最中の子どもたちは、書きたいことと表現のずれを修正しようとする複雑な思考が働いていることも知り得ることができた。

筆者は、この書きたい内容と表現のずれを修正しようとする過程が大切であると考えた。子どもたちが「自分の思いを十分に書くことができた」と感じられた時、子どもたちの思考も最も深まったととらえることができると推察するからである。発達段階に応じた書くことへの適切な指導の工夫が求められる。

第2章 考えを明確にした文章を書く力

第1節 「書く力」の分析

書く力を育てるためには、子どもたちの発達段階を踏まえて、指導者が見通しをもって取り組む

ことが大切である。そこで、学習指導要領の「書くこと」に関する指導内容を参考にして、子どもたちにつけたい態度を中心にして書きまとめたものが図1の「小中9年間『書くこと』のつけたい力系統図」である。

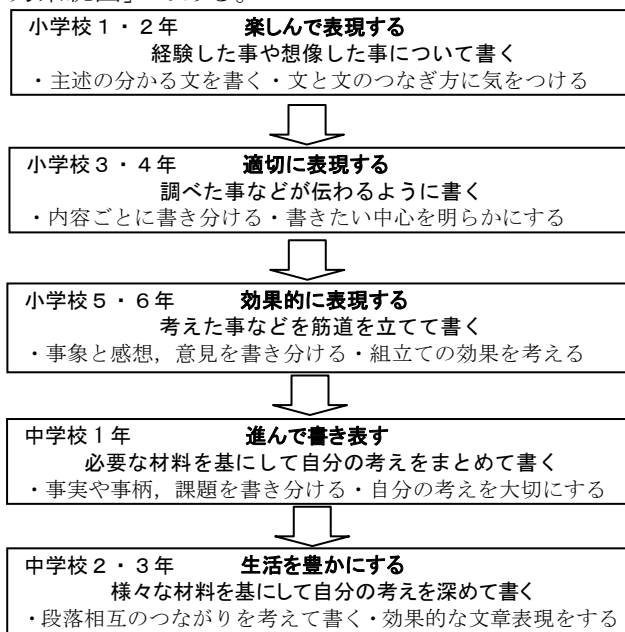


図1 小中9年間「書くこと」のつけたい力系統図

第2節 「書く力」を育てる授業

文章の作成過程を「①発想、②取材、③選材、④構成、⑤記述、⑥推敲、⑦評価」の7つの過程としてとらえ、その中の文章の「構成」「記述」に焦点を当てて授業実践を行った。その理由は、文章の構成を考えると自分の伝えたいことを繰り返し問い直すことにつながり、その過程が子どもの思考力を高めると考えたからである。また、構成を考えただけにとどまらずに、考えた文章の構成が生かされ、抵抗感なく子どもたちが記述できる力を育てるための指導の方法についての研究

を進めていきたいと考えたからである。

そこで、本研究では付箋紙を活用することで文章の構成を考え、自分の考えが相手に分かる文章を書く力を育てていきたい。

付箋紙には、思ったことを短い言葉で文字にするため、子どもたちにとって書くことへの抵抗感が少ないものになると思われる。また、文章の構成を考える際、付箋紙の位置を変えることが容易であるために繰り返し文章の構成を考えることができ、子どもたちの思考力も高めることができると推察するからである。

また、指導者の子どもに対する手立てを考える時、書く材料が十分にそろっていない子どもや、どのようにして文章を組み立てていけばよいのか分からずに困っている子どもなどの様子が把握しやすいと思われる。付箋紙を使うことで一人一人の学習の姿が見えやすいものにし、早い段階で手立てを講じることができるものと思われる。

第3章 「書く力」をはぐくむ授業の実践

第1節 小学校第4学年の授業実践

『本と友達になろう』の単元では、「おすすめの本カード」を書く学習を行った。学習を進めるにあたっては字数入りカードに紹介したい文を1文ずつカードに書く活動を行った。まずは、字数入りカードの枚数を増やすことを大切に考え、その後、100字以内に紹介文を書きまとめるようにした。字数を制限することにより、自分が伝えたい中心を考えながら書きまとめることができた。

『材料の選び方を考えよう』の単元では、学校の中で疑問に思ったことを伝えるためにポスターを書く学習を行った。



図2 構成を考える

その際、全体をとらえたり一部分に焦点をあてたりした書き方について学ぶことができた。そして、調べて分かったことや感想などを付箋紙に書き、文章の構成を考える活動を行った。ポスターに書く字数を150~200字に制限する中で伝えたい中心を明らかにしてポスターを書くことができた。

第2節 小学校第5学年の授業実践

『読書の世界を広げよう』の学習では、読んだことをもとにして、文章を書きまとめる学習を行った。学習を進めていく中で、「心に残った文」「文を選んだ理由を書く」「筆者が伝えたかったこと」

「友達と話し合っただけで深まったこと」など読み深めたことをもとにして、文章の構成を考えるようにした。学習を進める過程では書きためておいた付箋紙を使うことにより文章の構成を考え、自分の考えを明らかにした感想文を400字に書きまとめることができた。

また、『伝え合っただけで考えよう』の学習においても、環境問題に対し



図3 考えた構成をもとに記述する

「初めの考え」「調べたこと」「友達と話し合った感想」などについて、付箋紙に書く活動を大切にしました。これらの付箋紙の中から自分が伝えたい事柄を選んだり、並べかえたりする中で、自分の考えが伝わるような構成を考え、意見文を書くことができた。

第4章 本研究の成果と課題について

第1節 「書く力」を育てるために大切にしたいこと

光村図書の教科用図書では、書く力を育てるための表現様式が繰り返し配置されていることが分かる。例えば、手紙文を書く学習は小学校第4学年、小学第5学年、中学校第1学年に単元が配置されている。このように表現様式に着目した小中9年間のつながりをみることもできるが、本研究では表現様式の裏側にある、言語発達の面から育てたい力のつながりを意識することが大切であると考え、学習指導要領をもとに「小中9年間『書くこと』到達目標に関する一覧』を作成した。言語の発達の面からの育てたい力のつながりを考えた時、様々な表現様式に共通する文章の構成を考える力や記述する力を系統立てて指導していくことが大切であると思われる。

付箋紙を活用することにより、文章を書く前には書くための準備をすることが大切であることを子どもたちは学ぶことができた。

実践授業を行った学級の子どもたちは、付箋紙を使ったことのよさとして、「順番を変えるのに役に立った」「付箋紙の色を変えることで文章の構成が分かりやすかった」とアンケートに答えている。このことから子どもたちは付箋紙を使うことにより、自分の考えを明確にした文章を書くことができたと思われる。また、指導者にとっては調べた内容や思いが子ども一人一人によって違っても付箋紙を使うことで個別に、具体的に指導することができるというよさがあると推察する。